

俳句は謡うものである(三)

伊藤洋二

【其三：俳句とクラシック】

いよいよ難関のステージⅢを迎え、如何にして誌面を埋めるかと思案しつつ、改めまして「新年明けましておめでとうございます」。今年は申年、どうも木から落ちる予感がしきり。例年の通り「しがみついて」生きて行きます。

さて、クラシックも範囲が広いので楽器に特化して愚論を進めていきます。私は楽器の女王様バイオリンが好きです。因みに王様はピアノらしいです。特にベートーベンのヴァイオリン協奏曲ニ長調作品六が一押しです。四十年前に秋葉原で買ったレコードをこれまた当時のコンポーネントで鳴らしています。明治十年にエジソンが円柱型アナログレコードを発明し、同十二年にブラームスが「ハンガリー舞曲第一番」を自ら演奏し録音したのが史上初のレコーディングとされているのです。爾後、磁気テープ、CD、DVDと録音媒体は急速に進歩しました。

ここから、俳句との関係論に入りますが、これまで、「俳句」のみを録音したレコード、テープ、CDにお目にかかったことはありません。音楽も俳句も「生もの」ですが、音楽は、録音媒体によって残され、俳句は文字で残されてきました。今日まで親しまれている江戸・明治・大正・昭和の名句の新鮮さは、文字のみでも失われることなく残されています。これは、人間の普遍性につながるものを俳句が持っているからです。その俳句の本質は「天与の知恵」【滑稽】であり、それは嬉しくも「生命の根源」でもあります。クラシック音楽も俳句も、時代を越えて、生き物である人間の根源に訴える力をもっています。

では、時代を越えた、生きた俳句を創造する方法は何でしょうか。音楽と同じで、全ての生命を慈しむことであり、森羅万象に感謝する事だと考えます。人類は二百万年を経て進化し無駄のない生命の神秘を宿しています。だから、素晴らしい音楽、俳句を作ることができるのです。

これ以上の愚論は失礼に当たりますので、此処辺りで打ち止めと致します。我慢して目を通してくださった方々に厚く御礼申し上げます。「何事もやってみなけりゃ判らない」との開き直りで紙面を汚しましたが、自分なりに「よっしゃ」の気持ちです。今後とも滑稽俳句に邁進してまいります。会員の皆様よろしくお願い致します。私の好きな昭和期に活躍した女流俳人四Tの句です。

生き堪へて身に沁むばかり藍浴衣 橋本多佳子

老鶯や泪たまれば啼きにけり 三橋鷹女

河豚刺身何しんみりとさすものぞ 中村汀女

下萌えぬ人間それに従ひぬ 星野立子

なんと素晴らしい。涙が潤んできます。生命の尊厳を詠んでいるから今生きているとの実感が湧くのです。

俳句日記は心の日記

生きる命の日付印 洋二

(完)